

ちらちらと視線を送ってくる和哉に身体を向ける。そんなまどかを見て、千香が憎らしげに唇を歪めた。そして、

「どうしたらそんな無駄に大きくなるんですかあ？ やっぱり、たくさんの人に揉まれたんでしょね、アレ。いやらしいなあ……ね、和哉センパイっ」

「え、ええと、その……」

「わかってますよ、和哉センパイは優しいから、幼なじみのまどか先輩を表立っておとし貶められないんでしょ？ 和哉センパイはこれくらいのこと、自分の胸に和哉の手を導く。」

「これくらいのサイズが好きなんですよね？」

「あ……ちよつと、千香ちゃん……」

手をどけようとするが、千香はさらに胸に押しつけてくる。明らかに、まどかへの当てつけだ。

努めて冷静さを装い、まどかは水着を脚から抜いていく。濡れて肌に張りついた秘毛が、ひどく煽情的だ。その下に隠された亀裂も、はつきりと透けて見える。

初めて異性に肌をさらすことに抵抗はあったが、ここまで来たら引きかえせない。それに、この非日常的なストリップショーに、まどかは背徳の興奮も感じはじめてい

た。全身が粟立つような、ゾクゾクする感覚。

(フフフ……見てるわね、和哉。どう、私の裸？ 胸が大きいだけじゃないんだから、私……。ほら、この水泳で引き締まったウエストとヒップはどうかしら？ そして、まだ誰にも見せたことのない、私の一番いやらしい茂みは？……)

最初は気まずそうにしていた和哉も、次第に熱っぽい視線をまどかの肢体に注いでくる。

「まどか先輩、さっさと水着に着替えて！ それとも、その裸の写真を校内中にバラまきますか!？」

そんな和哉に千香も気づいたのか、きつい口調で叱責する。同じ男を想う女なのだ、まどかが考えていることを察したのだろう。

千香に急かされ、まどかはしぶしぶ渡された水着に着替える。確かにサイズはピッタリだったが、

(やだ……これ、完全に透けちゃうじゃない……)

特殊な薄い生地でこしらえられた競泳水着は、まどかの引き締まったボディラインをあますところなく浮きあがらせていた。

女子高生とは思えない成熟した乳房は、乳首だけでなく乳輪まで透けていたし、縦



に割れたヘソも、その下に群生する恥毛ですらはつきりと視認できた。なにより、生地が深々と食いこんだクレヴァスが最も淫靡いんぴだった。

「どうですか、着心地は？ インターネットで購入した、特殊な水着ですからね」

こんなものが一般に売られているはずはないから、おそらくはアダルト系のショップで買ったのだろう。こういったものを好むマニアが多いということだ。

「やだ……なんかこれ、ちょっと小さいかも……」

食いこむのが気になるのか、まどかがしきりに股間の布をいじる。ちょっと動くと、ヘアがはみでてしまうのだ。

「着替えたなら、さっさと泳いでください。それも、平泳ぎでね」

この水着で水に入れば、間違いなく全裸と変わらないくらいに透けて見えるだろう。そんな状態で、大きく股を開く平泳ぎをさせる……。

千香の残虐さに、まどかはあらためて戦慄した。この可愛い容姿の下に、どれほどの闇を巣くわしているのか……。

屈辱をぐっとこらえ、指示どおりプールに飛びこむ。覚悟を決めて平泳ぎをはじめようとするとところに、

ドボン！